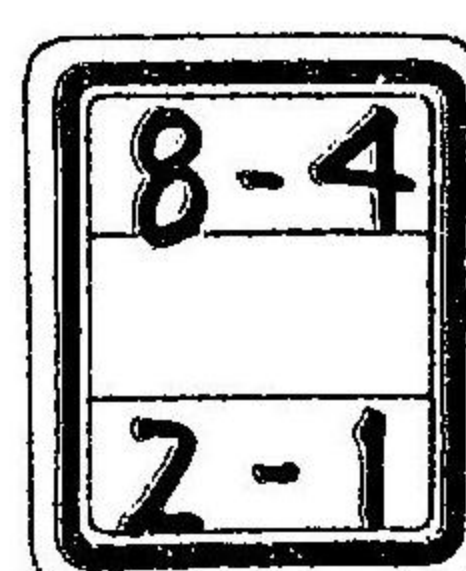


大江戶芝居年中行事ノ内

一

8-4
2-1

大江戸芝居年中行事ノ内





羽渡
 予者や正月にこれ後者の
 入形に此羽渡と申すは
 ます初ま仕仕は
 羽渡一少後武を
 出一未羽と申すは
 下敷格あるものなり
 子記
 行
 月
 かあめ



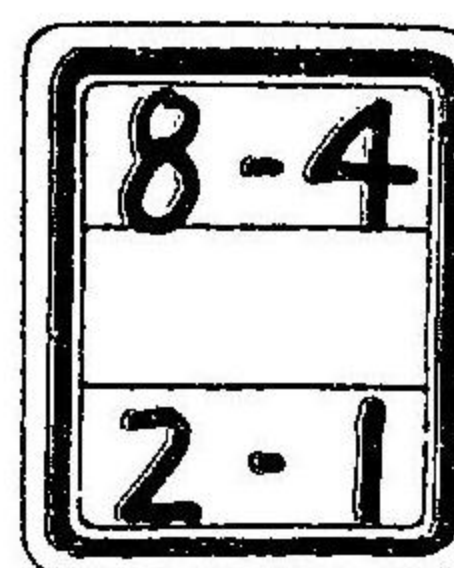
鳥居清貞筆



明治三十一年一月十日印刷
 京橋區南傳馬町二丁目十七番地
 長谷川寿美



大江戸芝居年中行事ノ内



大正十一年
 大正十一年
 大正十一年

芝居町の初七日
 名歌後者の年始廻り初七日
 の名例にて古来より芝居町
 の芝居町の芝居町を
 中目黒小入乃月まつり
 川家お梅の祓り三井お辰
 付きお辰の芝居町の本家
 本家お辰の芝居町
 お辰の芝居町
 お辰の芝居町
 お辰の芝居町

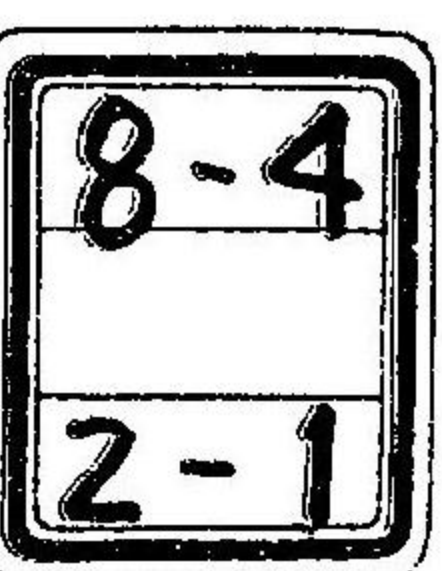


明治三十年一月十日印刷
 長谷川寿美
 京橋區南傳馬町二丁目十七番地

徳光
 徳光



大江戸芝居年中行事ノ内





猿若の寶物
 寛永九年申年徳川家の軍船
 安宅丸伊豆國より江戸まで
 り時猿若勘三郎は命とり
 て船首まゝ本遣り音頭と
 唱せしむ此節金の塵を賜る
 勘三郎代々の寶物とし甲子
 の年又座元代替りおまは此の
 塵を他の宝物と共に舞臺
 へ陳列し勘三郎覆面を寶
 を持て市川團十郎此の來歴
 を述べ次々本をとり音頭と唱ふ
 まし猿若勘三郎を演ずると
 言劇となす
 此の形あり
 毎の猿若を演ずる



明治三十四年四月 日印刷全年全月 日發行
 東京市京橋區南橋馬町二十日十七番地
 臨寫印刷發行所長谷川壽美



大江戶芝居年中行事ノ内

大正十一年
 大正十一年
 大正十一年

ワキ犯言
 三対七三番叟の次は照犯言を演ず
 一為大鼓の夜明けと告げワキ犯言を用
 出を待すこと五位にて林甚世を圍く
 中村大正十一年一月十七番地
 座七福神の辨字西座の甲子持
 福の林も赤もとらふ何れも古賢か
 るものあり也勤の役者ハ橋高所の
 下身者子方ハ二枚目より見習迄
 内之者を勤む大伴ある等居
 婦さし此口犯言ハ為りて無
 種ありとぞ
 橋高所の人

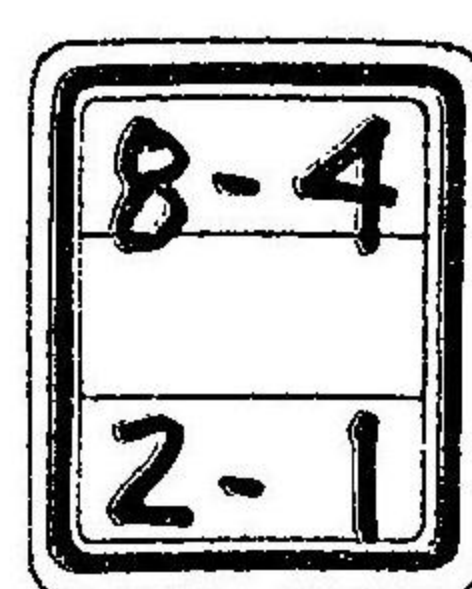


明治三十一年一月十七日印刷
 京橋區南傳馬町二丁目十七番地
 長谷川寿美

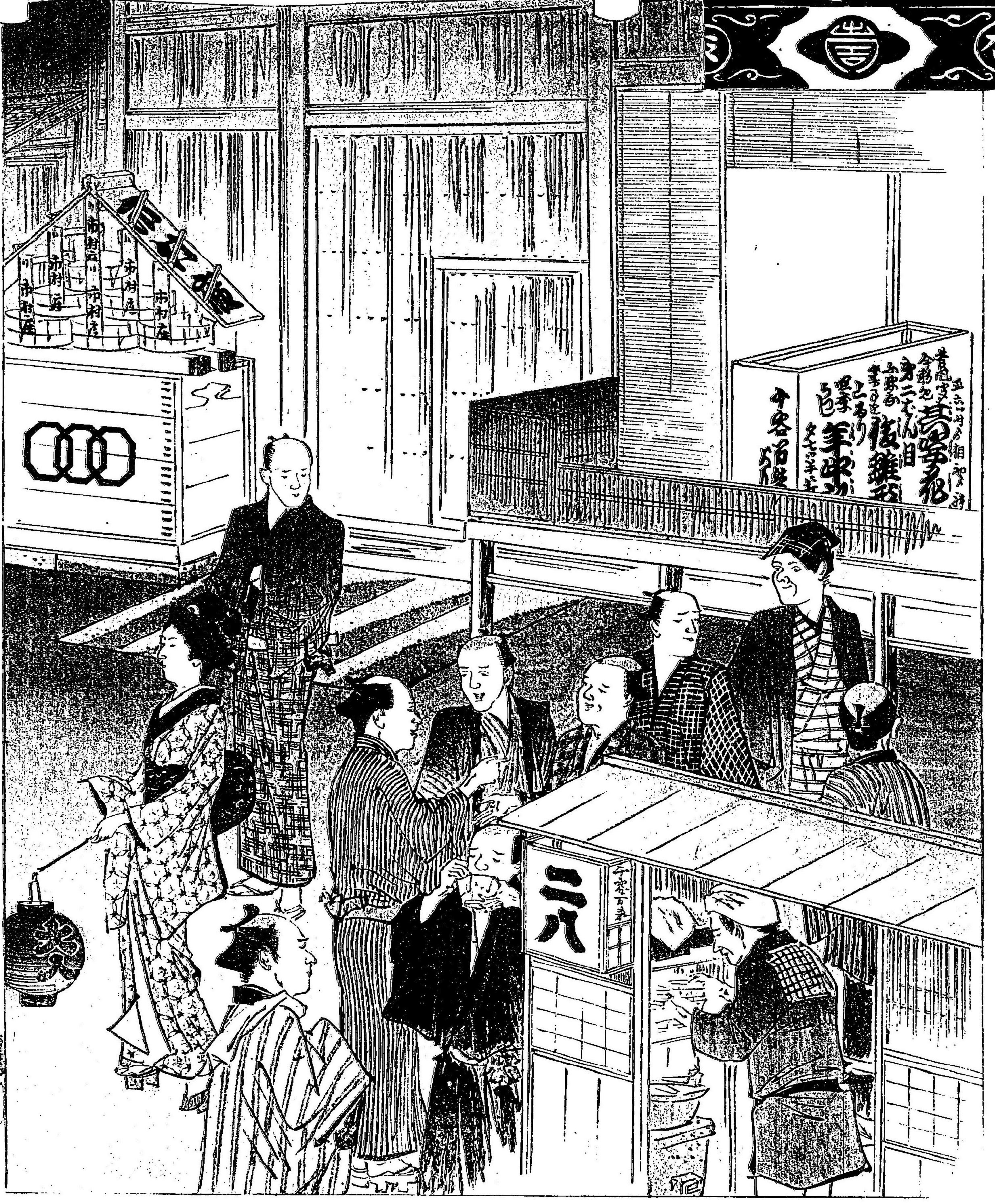


吟光

大江戸芝居年中行事ノ内



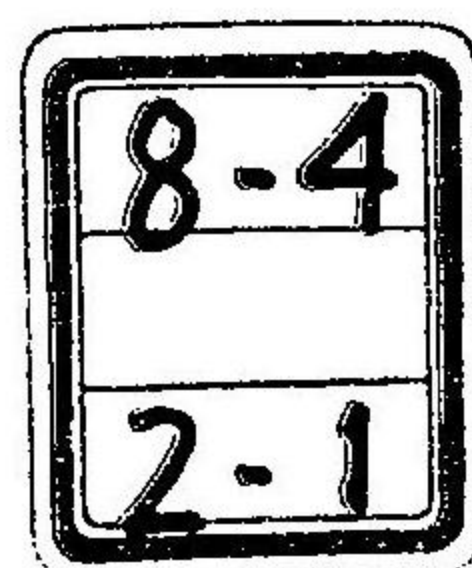
風吹きて
 芝居の打出後座の表
 ... (transcribed text) ...
 大立戸
 ... (transcribed text) ...
 ... (transcribed text) ...



明治三十四年四月
 日印刷今年今月
 東京市京橋區南傳馬町二丁目十七番地
 日發行臨寫印刷發行所長谷川壽美



大江戶芝居年中行事ノ内



大江戸
 徳島
 志士

黒札
 芝居の入り口には、黒札が掲げられてゐる。これは、芝居の入り口を、芝居の入り口と見せしめる。芝居の入り口には、黒札が掲げられてゐる。これは、芝居の入り口を、芝居の入り口と見せしめる。芝居の入り口には、黒札が掲げられてゐる。これは、芝居の入り口を、芝居の入り口と見せしめる。

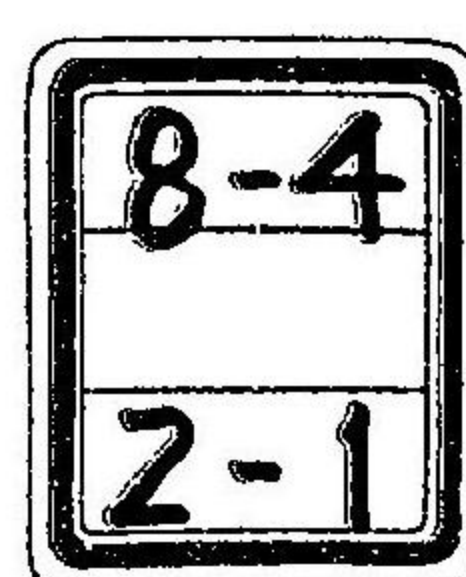


何所何所何所何所何所何所
 何所何所何所何所何所何所
 何所何所何所何所何所何所

明治廿九年九月 印刷全年全月 日発行
 東京市京橋区南傳馬町三丁目十六番
 臨字印刷兼発行者長谷川壽美



大江戶芝居年中行事ノ内





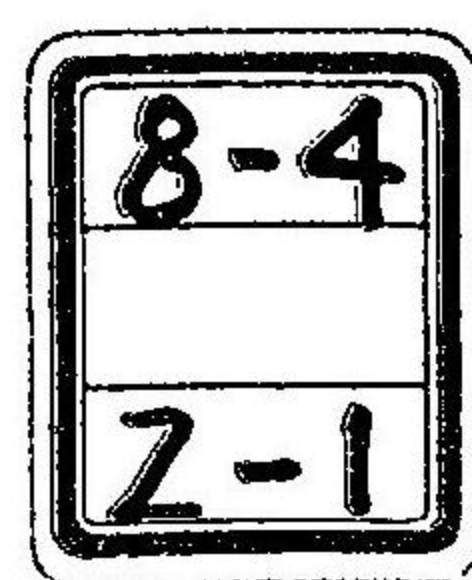
くど取
 三座の役者入替り
 先づ其座元達手代
 引連を料理座
 役者を上中下の
 作り之を多きて
 面附とも親しむ者
 あり



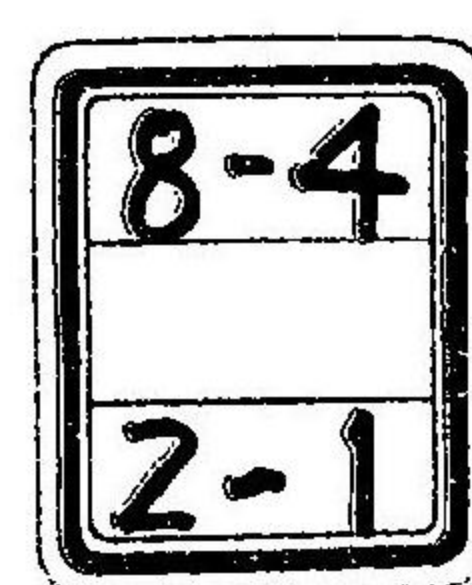
明治四年四月二日印刷
 東京市京橋區南橋島町二丁目十七番地
 臨寫印刷兼發行者長谷川壽美



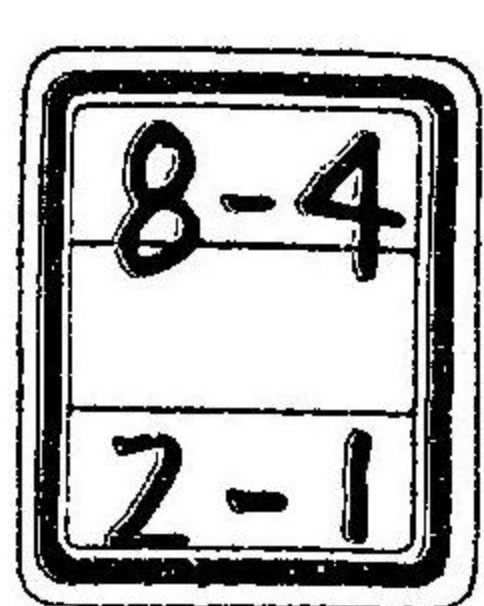
大江戶芝居年中行事、内



大江戶芝居年中行事ノ内

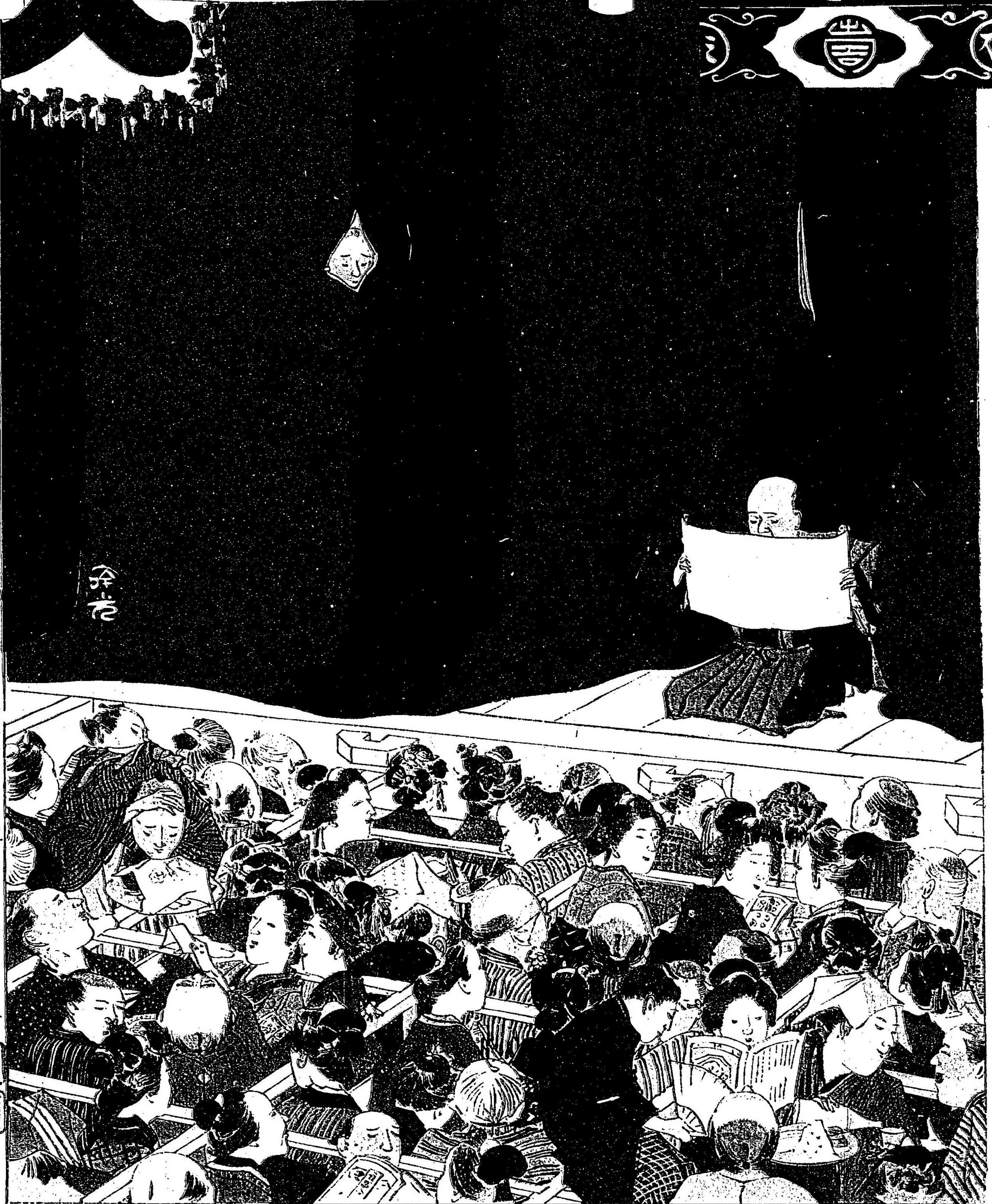


大江戸芝居年中行事ノ内



大正十一年
 大正十一年
 大正十一年

芝居の幕ハ中村氏其の
 村紺白市村村村村村村
 守四座見ハ紺村白市の本順
 冬三郎幕府九松手の目除け
 三郎幕府九松手の目除け
 幕と受領して用ひた始と
 以上一書目狂言ハ幕外ハ
 役人の習名と讀む二番
 目狂言と幕外口上の
 例とす



明治三十年一月十日印刷
 京橋區南傳馬町二丁目十七番地
 長谷川寿美



二三四一八。

大江戶芝居年中行事ノ内

一三

8-4
2-1



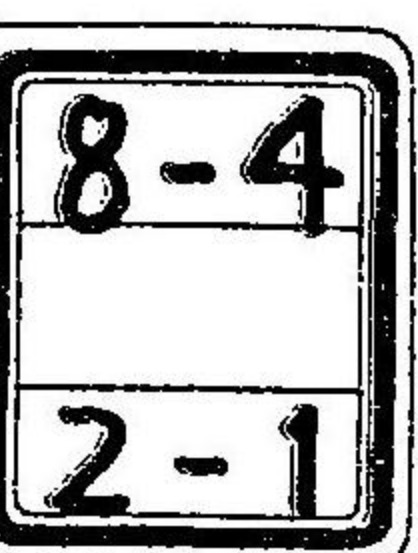
樂屋入り
 興行中 後者の楽屋
 入り 伊達と見
 女形 結い 曲又 友禪の大振
 袖裾も 風を 薫
 物の香も あつて 後
 どの人にも 流し
 のさし 裏木戸より 掃り
 込むさる 金よ 千の 値ある
 心



明治廿年 月 日 印刷 今年 全月 日 発行
 東京市京橋區南傳馬町二丁目十七番地 臨寫印刷兼發行 者長谷川 壽美

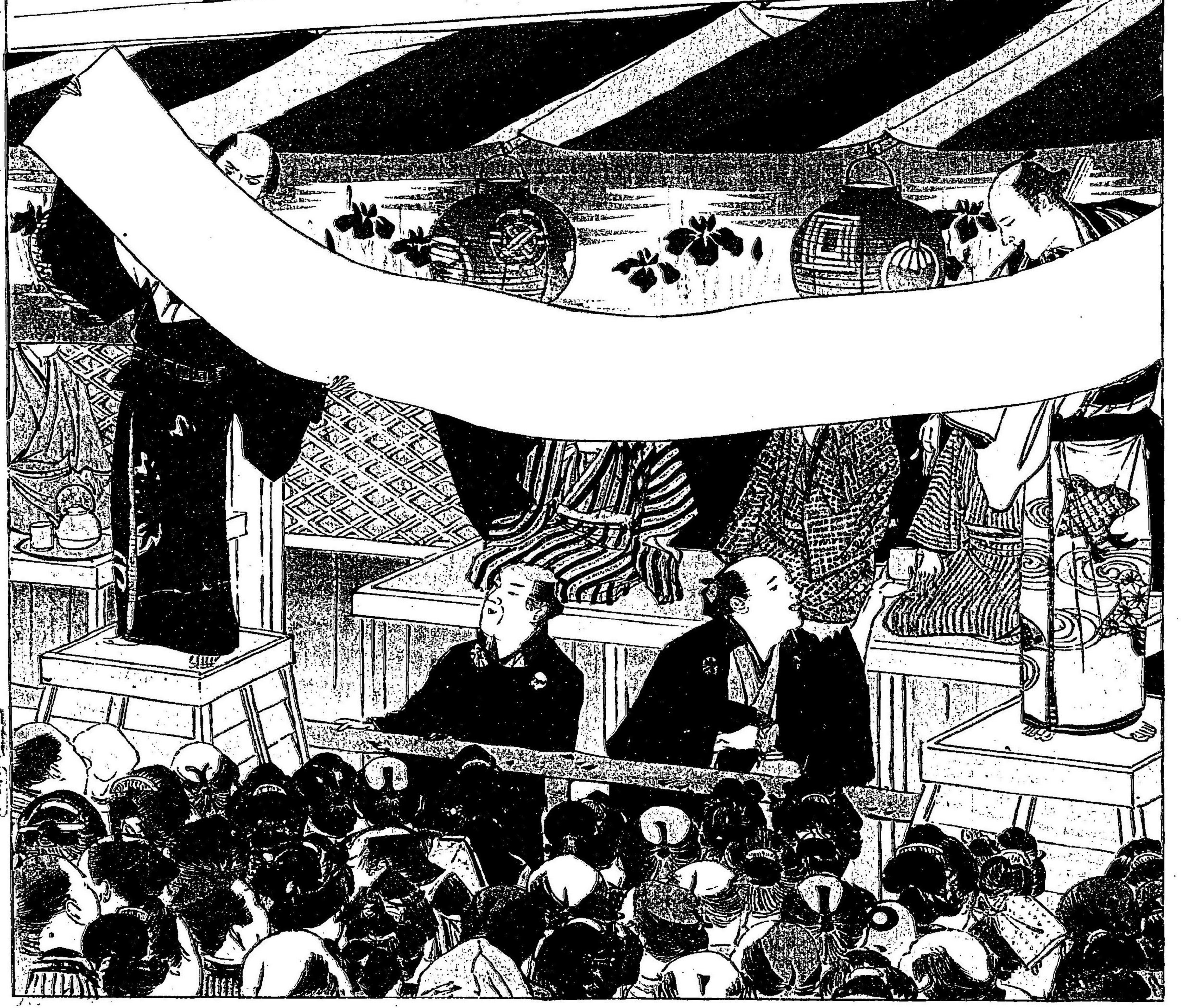
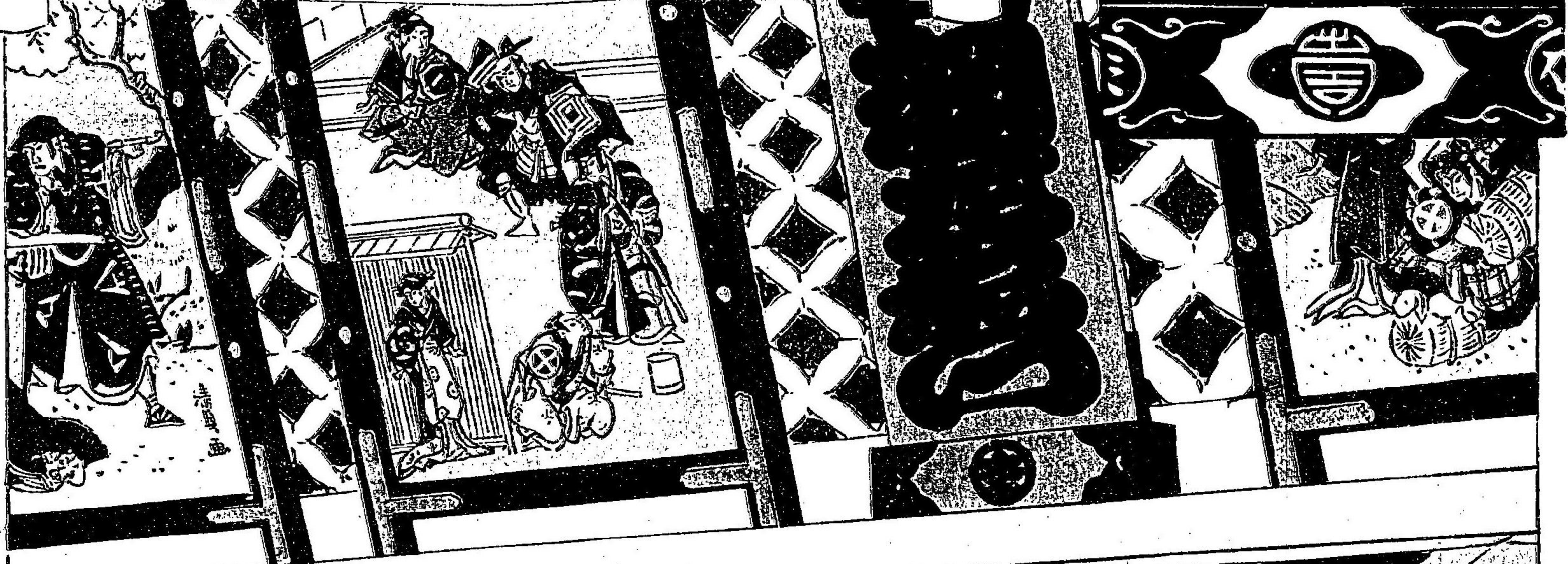


大江戶芝居年中行事ノ内



大正戸
 読心集
 志むを

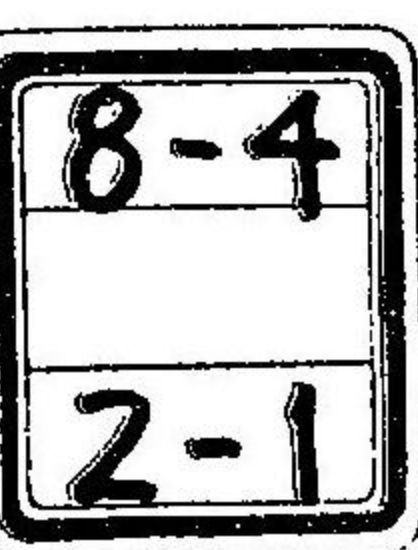
讀心集
 初日のお日毎に讀立とて本戸
 読心集が本戸が日々にね言を
 野殺人習名と讀立と作を
 讀心集の役者の声色
 を讀心と吉例とに此のま
 ち、讀心集のそのらんおん
 の如く集りて中し讀心
 あつてのやりのり
 多林
 産部らの 集み
 本戸讀心集
 似てやりのり
 もつた集り



昭和四年四月 日 昭和四年七月 日 野村胡堂 野村胡堂發行所 長谷川清美



大江戸芝居年中行事ノ内





感亭流
 元祖中村勘三郎の甥中村
 感亭と云ふ人あり溝口流の書と
 能く一帯に審判看板かを書
 きしが竟に工風一く一孤丸
 字体を以て感亭の流是を也
 予も居繪ハ其川乃流と
 酒一一家を為一感亭
 と好一對乃妙筆もや改良
 人歩の今利益子遺風を
 ままひを極と学せしむる
 大いおますすれ



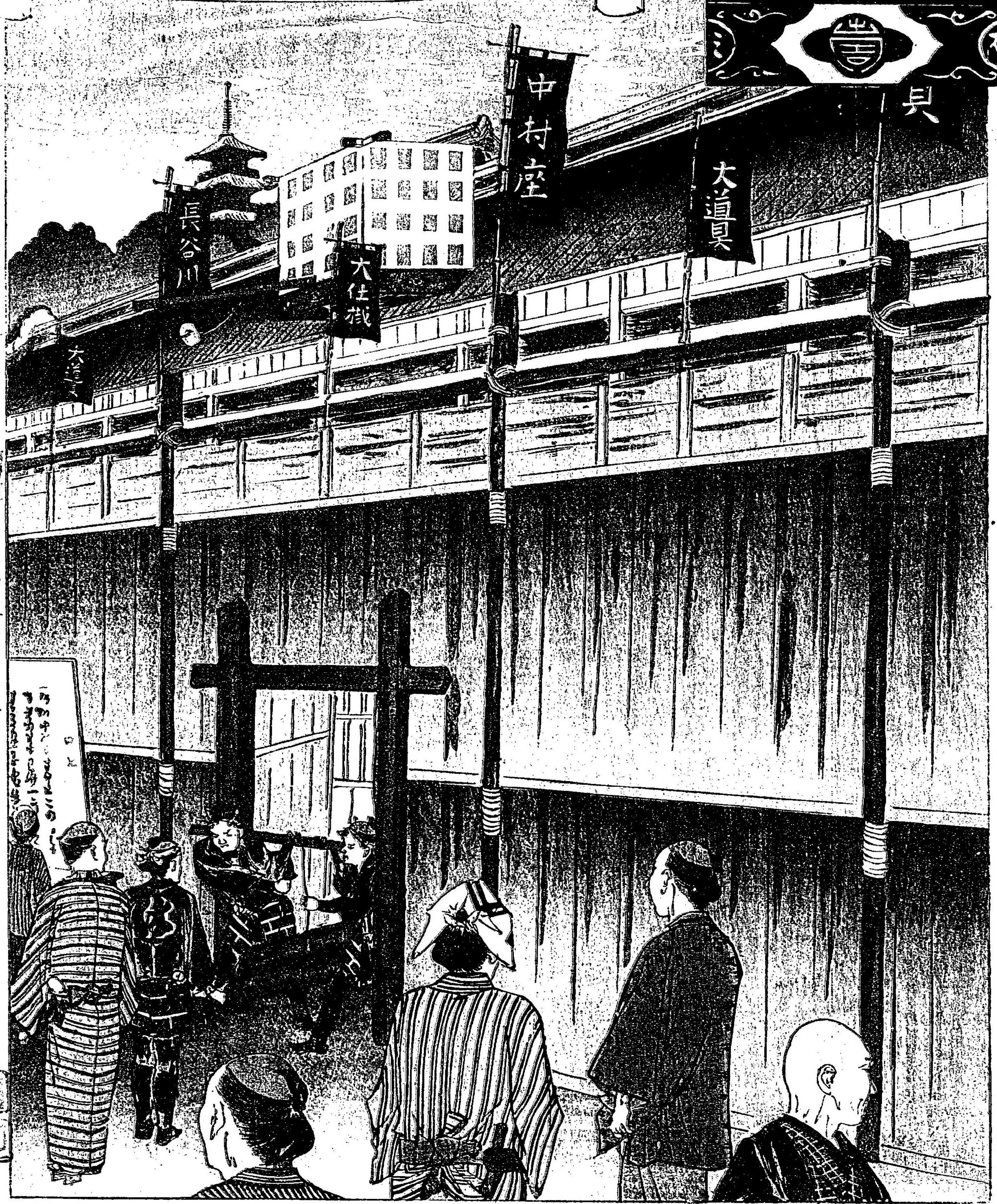
明治四年八月 印刷全年全月 見洋
 東京市京橋区南馬場町二丁目七十八番 臨字印刷兼発行者長谷川壽美



大江戶芝居年中行事ノ内



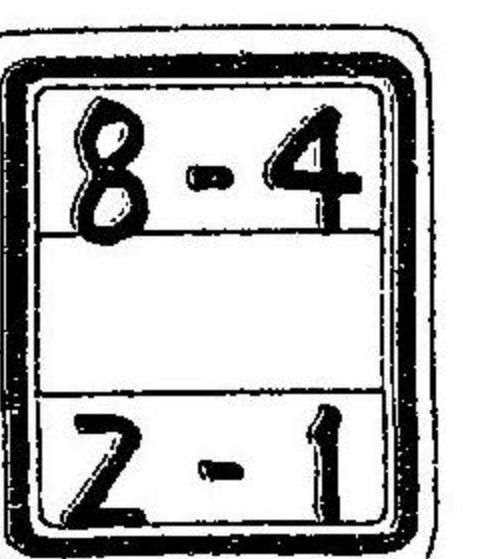
板垣ひ
 芝居談の耐まゝ大谷具工
 亭中六屋外板垣ひと為す其
 常時幕板三枚の垣ひ幕府
 乃外に禁下りも芝居のみハ許
 されとをす小帳ハ座名
 と長谷川の名と一ツ置き
 樹々引らゆる子守の阿
 大道具の格勢も盛ん
 志むね知まらざる者
 おもひもや
 志むねの大谷具大
 餅と並ぶ其い



明治廿九年 月 日 年
 東京市 本郷區 南傳馬町 三十一番地 臨寫 長谷川 壽美

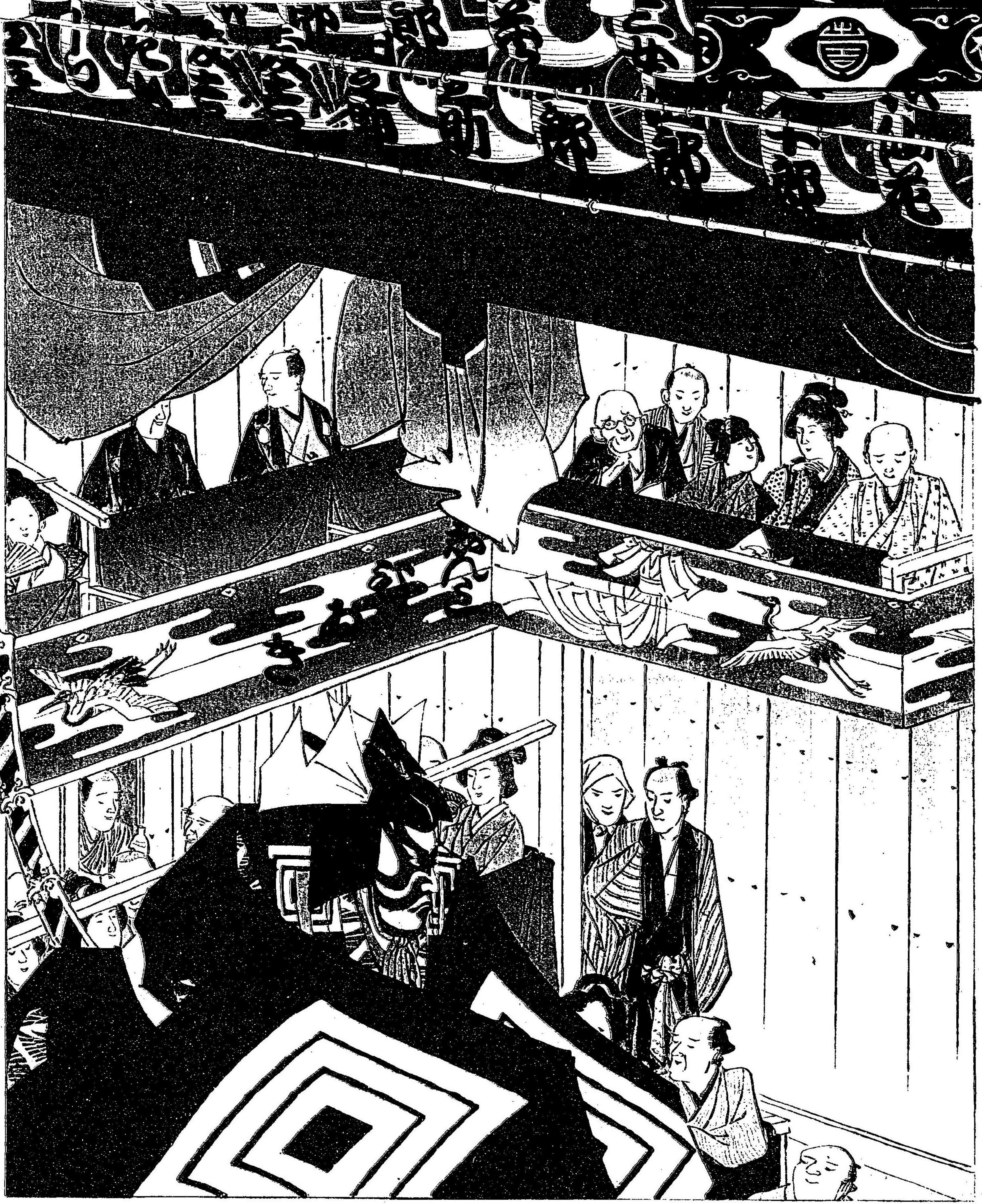


大江戸芝居年中行事ノ内



大正戸
 志むる

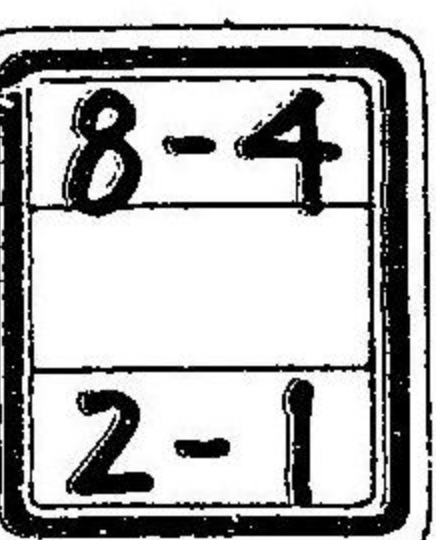
坊論の投灯
 影の世に居るハ坊論の
 投灯とて善の天子井
 り大教の長でうちんと下
 出ぬき座の入替りの役者
 此名を志す。一張一人宛と空
 め数個と志するとを例とす
 附
 志むる



明治三十四年 月 日
 東京市丸の内區神田區三丁目十七番地
 臨賣印刷發行所 長谷川 壽美



大江戸芝居年中行事ノ内



大正戸
大正戸
志むる

大箱提燈
おろきとてりて
頼り世の肴板の左方出すと
大お提燈といひ又茶屋飾
おろ下りおん中村市村ら
お座りてお地へ白森回座
お地へおまゝお家早く中
お所を認めお例とて
席におお櫓蓋布も初日の
前日より千秋楽まゝお
お休むお陰と
下りおんお灯籠
おおの頼りお母れその
肴板より人々大箱



明治三十八年八月 日印刷今年全月 日誌活字印刷兼発行著長谷川壽美
東京市京橋区南橋町三丁目十七番

長谷川壽美印

大江戸芝居年中行事ノ内



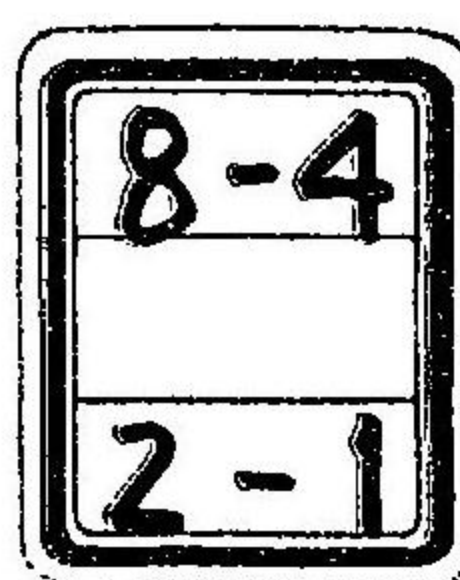
大津橋荷 ちり
 旧代目市村竹之丞の遺子久田の守之丞
 半右衛門大坂へ参りて大津橋荷を
 女抱まゝに江戸へ歸りて
 之を去りてめんとして魂を竹之丞に
 りて射と大の者も後を往く
 那ふに於て乃つて大津橋荷と
 ちりせしむるに二階大津橋荷と
 り大津橋荷と大津橋荷と
 件と為す所例に大津橋荷と
 千石竹之丞の遺子の久田の守之丞
 橋荷を多く此の橋荷の
 ちりせしむるに二階大津橋荷と



火の用心

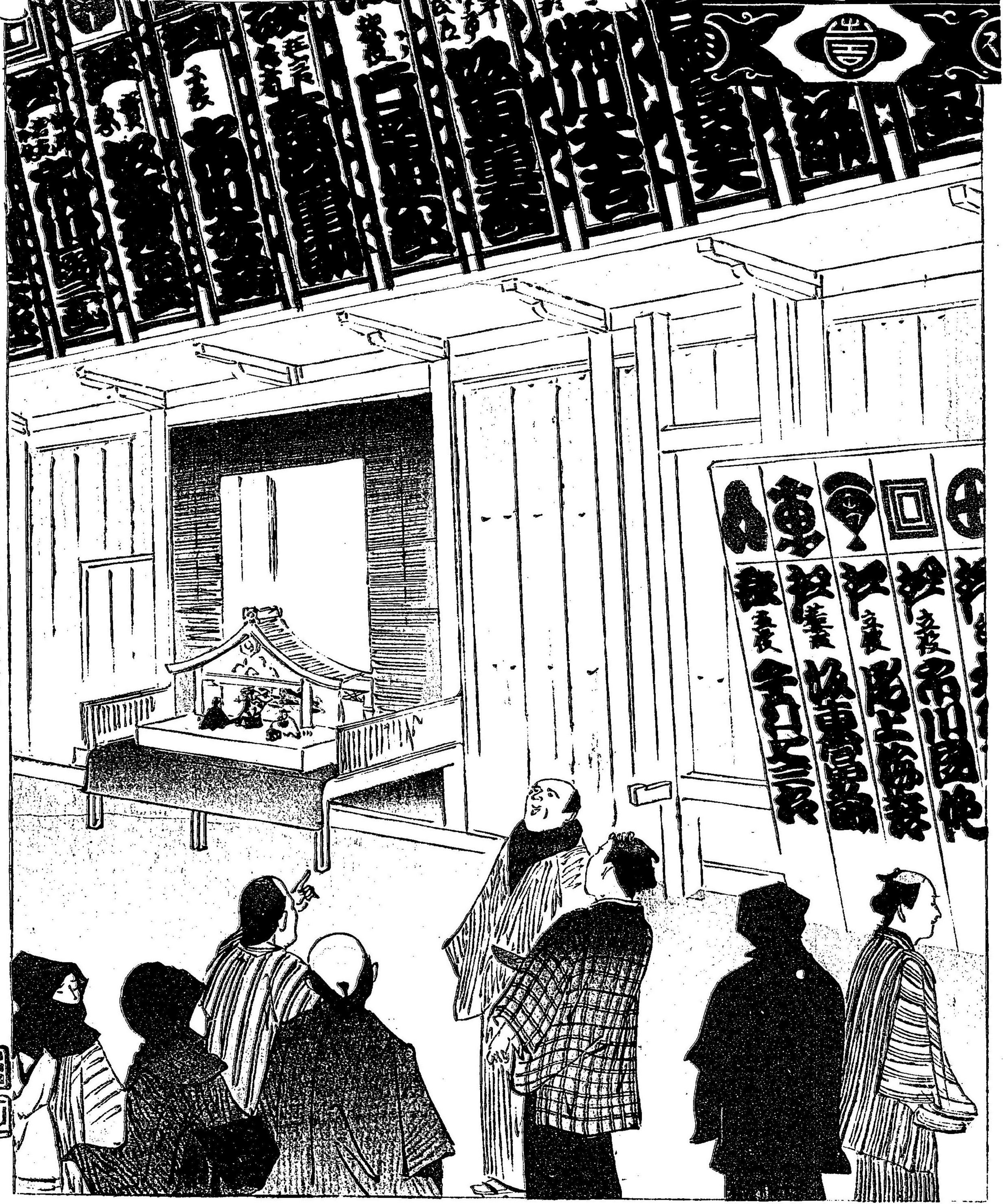


大江戸芝居年中行事ノ内



大正 大正
 志むる

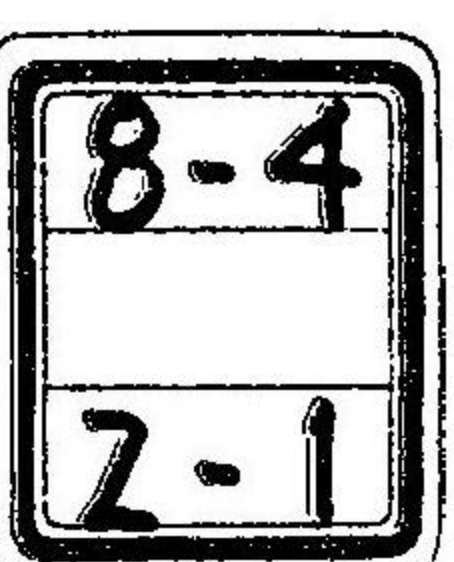
紋看板
 紋見せ方 初盆に各段入り
 り後者の名を書きし看板を
 とりて此内下廻り後者の看板
 板と云ふ此内下廻り後者の看板
 本戸子の出る飾り等俗に大
 シヨコと申しめらるる仕切板并
 茶居の二階より競ふ飾り
 物と云ふ所の入るは後者
 其全盛今宵の人乃知所
 あり



明治三十七年七月二十日印刷全年今月世是行 臨写印刷發行着長谷川壽美
 東京市京橋区南橋馬場三丁目十七番子



大江戸芝居年中行事ノ内



大女戸
お月見ぼ
あむる

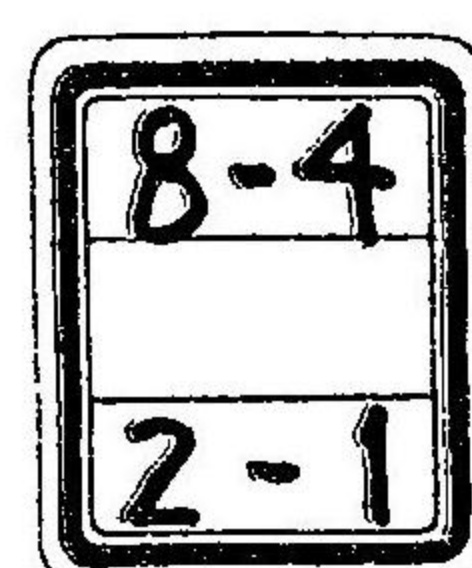
お月見ぼ
下り後者のお月見ぼ
後者のぼまより所作はね
言は種々移りて大抵は
おりの幕下下画く如き
出立せりや一立廻り
あはく口上りせりあを述
るを例やあは
あは
お月見ぼ
あむる
あむる



明治廿年四月一日印刷
東京市京橋區南橋馬町二丁目十七番地
發行 錦寫中兼發行 長谷川壽美



大江戸芝居年中行事ノ内





本戸羽織
 昔の本戸番は羽織を着て、
 本戸番は井いしを招き、
 とま。本羽織は立あがり
 の仕は母まて何をも五つ後
 の振様。とらるも扱は
 座頭より送るもの。さ
 本戸番は...
 羽織...
 永く...
 大入...

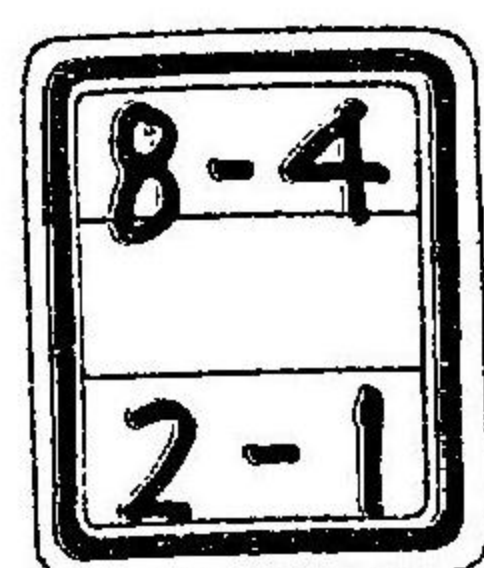


明治三十七年三月三日
 京橋區南傳馬町式丁目拾七番地

長谷川壽美



大江戶芝居年中行事ノ内





猿若犯言
 明治三十年五月廿三日
 中村勘三郎
 内裏へ召されて猿若犯言を
 演じし時、竹の影赤きを
 あかしや呼ぬりしは、ま
 け代傳と名をとり、その
 お領の品、今も中村勘三郎の
 宝庫に蔵し、其後の座元代
 傳り又、甲子年より、其の
 を興行する者、多くは猿若の
 犯言、すなわち他門に、新
 古歌の二種あり、あ、江戸
 芝居の始、中村勘三郎を
 祖とす、とあり、よ、大
 江戸



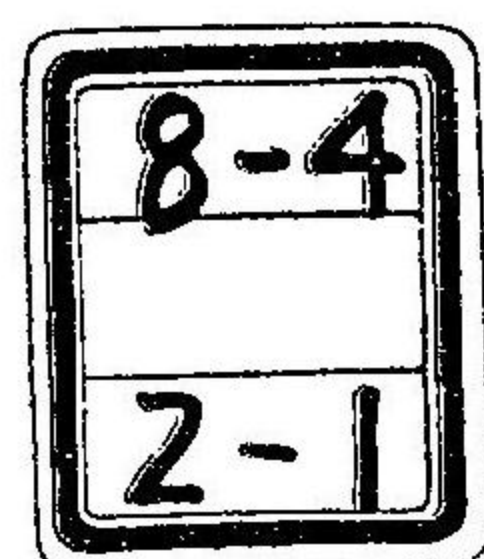
鳥居清真画

明治三十年二月五日印刷
 全年二月十日發行
 京橋區南傳馬町二丁目十七番地

長谷川壽美



大江戸芝居年中行事ノ内



大江戸
 徳川幕府
 志むる

さしや。かててい
 昔のよき風をよき一節に倣ふ
 面影をよめえ後者が指す
 ひてよ。昔をたぬる編と
 之と懸下し又昔を前かんと
 と稱し編端を指す此圖
 此の世にこの世の中一は
 中村のよき節が好めよ
 のよき風をよき一節に倣ふ
 此の世にこの世の中一は
 中村のよき節が好めよ
 のよき風をよき一節に倣ふ

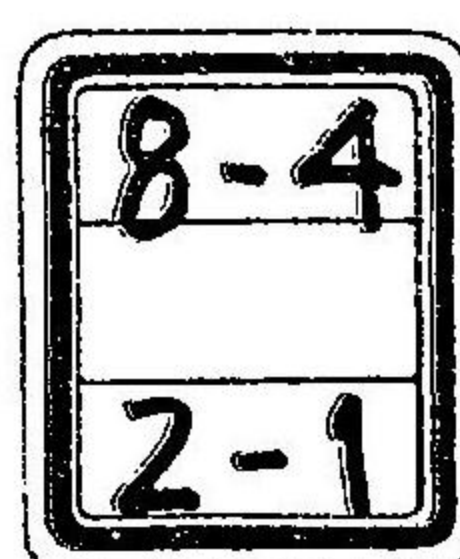


蕉翁
 吟光
 長谷川

明治三十年二月八日印刷全年二月十日發行
 京橋區南傳馬町二丁目十七番地 長谷川壽美



大江戶芝居年中行事ノ内





序開
 往時の芝居は六三番口キ程言
 の次へは詰す物と序開きや
 て稽古所を教む何れも同
 様に赴向する例も二三の人が
 神社堂と納め所へ入るの程天
 があんな化してはまあるも痛
 ちどあつてト其のまを
 又あつたさうさう中世を
 ちりちり一帯の向は自づか
 首尾とのひものさう
 序開きや
 ちりちり一帯の向は自づか



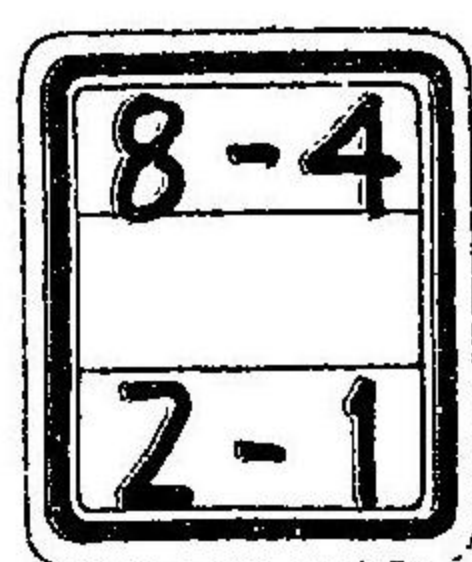
明治三十年一月一日印刷
 京橋區南傳馬町二丁目十七番地

長谷川寿美



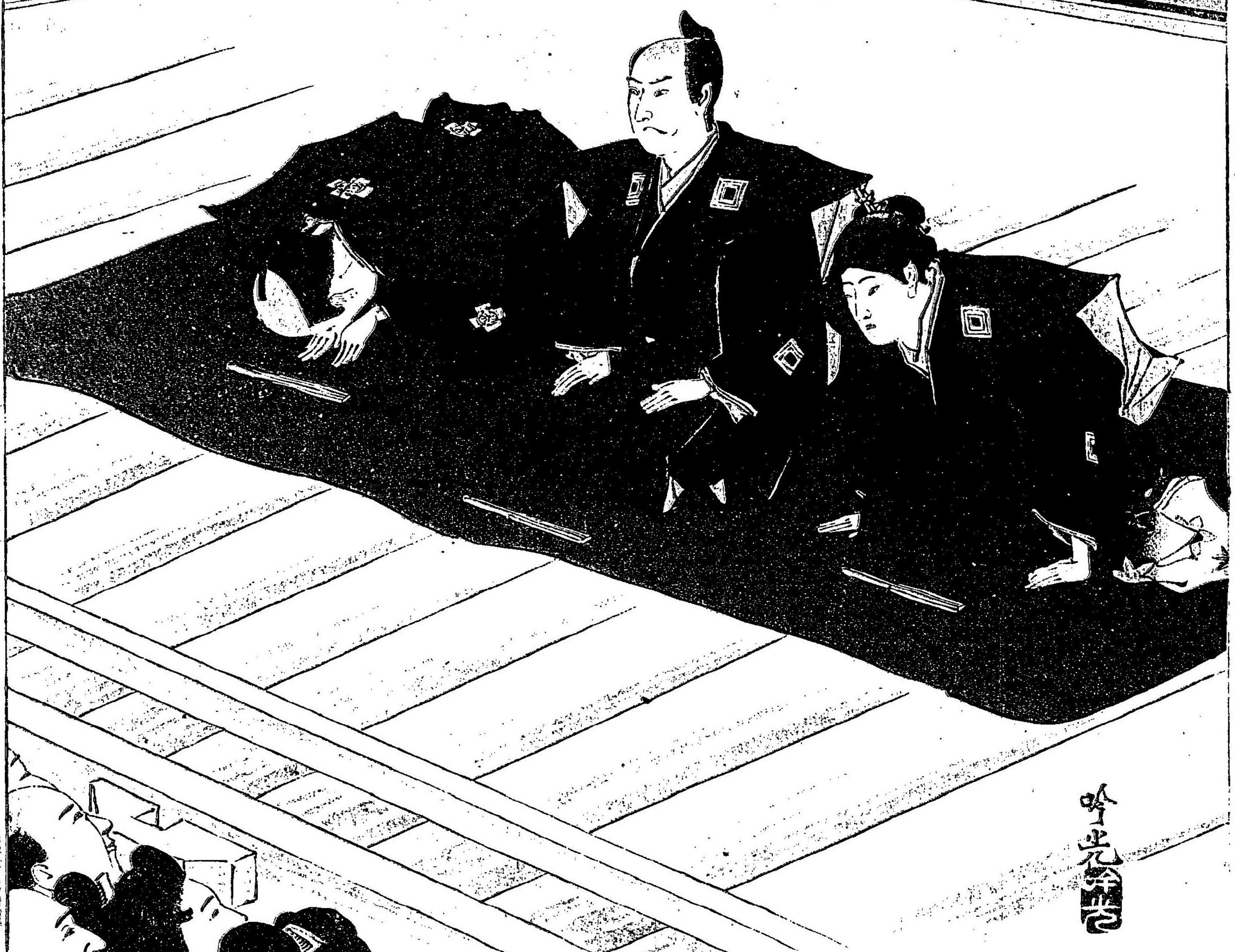
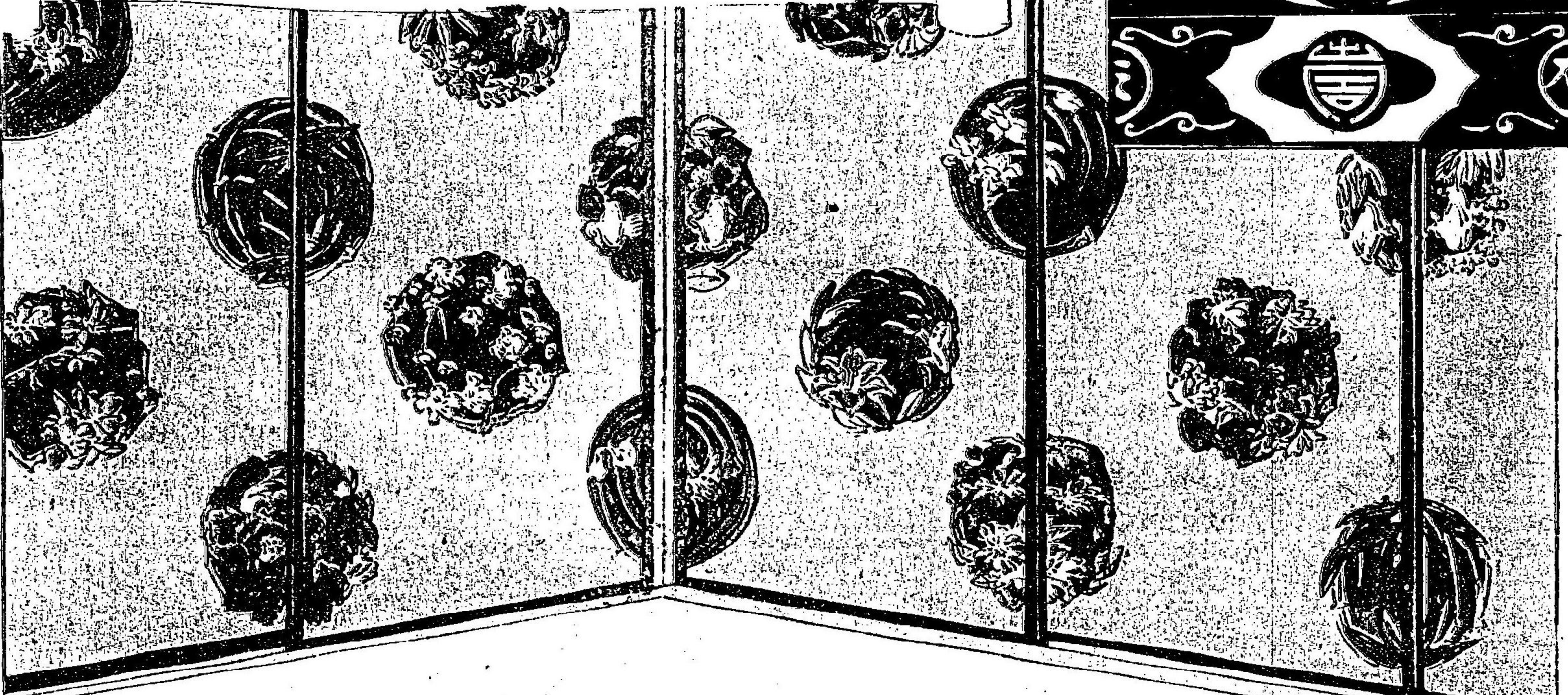
應和
 時光

大江戶芝居年中行事ノ内





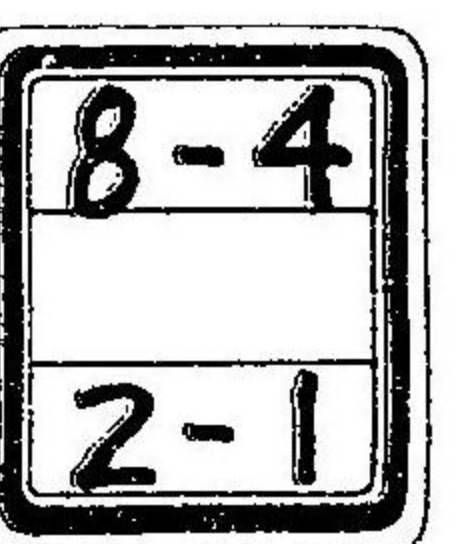
被褥の口上
 級考の自の口上
 本或は思武あり下は画
 図をて中武も若る優
 ちやうど市川男が
 伴男は女寅あ人の改は
 の口上とて所は思は
 常船の口上とて所は
 ちやうど市川男が
 伴男は女寅あ人の改は
 の口上とて所は思は
 常船の口上とて所は
 ちやうど市川男が
 伴男は女寅あ人の改は
 の口上とて所は思は
 常船の口上とて所は



大正三年三月十日發行
 長谷川寿美

吟光

大江戸芝居年中行事ノ内



大正 有志者

新宝の式
 三座後者の入幕り十一月十日
 新宝の式
 彼を前一人の幕り
 持て向うとをさす
 出づる言々
 市川十郎八右衛門
 例とす
 子役お中
 初子は初め
 新宝の式



吟光

074776-000-7

別-8421

大江戸芝居年中行事

吟光等/著

M30

CEK-0074

